九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

姉崎正治の宗教思想の特徴 ： 彼の人本主義と民本主義に焦点を当てて

古賀, 元章
福岡教育大学 ： 名誉教授

https://doi.org/10.15017/1905864

出版情報：Comparatio. 21, pp.36-44, 2017-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

姉崎正治の宗教思想の特徴
―彼の人本主義と民本主義に焦点を当てて―

古賀元章

はじめに

一九〇〇年、宗教学者の姉崎正治（一八七三―一九四九）は、『宗教学概論』を刊行し、宗教学が三つの要素（人心、それを取り巻く社会、両者を統括する何か偉大な勢力）で成り立っていることを主張する。（注一）三つの要素は、当時の彼が抱く宗教思想の構成要素でもある。帝国大学文科大学哲学科の同級生で高名な文芸評論家の高山樗牛（一八七一―一九〇二）の影響を受けて、一九〇五年の彼は人心の模範である日蓮（一二二二―八二）の信仰を表明する（注二）。この表明以後、第一次世界大戦（一九一四―一八）の前、彼の宗教思想の特徴は、人心、現実社会、天皇制国家（注三）の三位一体となる。

第一次世界大戦の末期、個人の人格と社会関係を重視する人本主義と、個人の社会生活の道徳的原理に注視する民本主義の新たな提唱を背景に、姉崎は戦後の望ましい日本のあり方として、国内統治と国際協調の推進を見据える。右述した三位一体の推進役として宗教の力を考える彼の宗教思想の特徴は、人本主義と民本主義を反映させたものとなる。大戦後、姉崎は聖徳太子（五七四―六二二）にこれら二つの主義が認められることに注目して、民本主義者としての太子の功績を高く評価する。

晩年まで、姉崎は日蓮信仰と聖徳太子信仰を共有して、人本主義と民本主義を取り入れた宗教思想を堅持する。それが、第一次世界大戦の末期以後における彼の宗教思想の特徴となる。

本稿では、姉崎の人本主義と民本主義の提唱とその背景に着目して、彼の宗教思想の特徴がどのように繰り広げられていったかを検討したい。

一　第一次世界大戦以前の姉崎の宗教思想―人心重視

本稿の冒頭で述べたように、『宗教学概論』に見られる姉崎の宗教学の骨子は、起点としての人心、それを取り巻く社会、両者を統括する勢力から構成されている。その骨子は同時に、彼の宗教思想の骨子となっていると言える。

姉崎は海外留学（一九〇〇―〇三）の機会を与えられる。海外留学中の一九〇二年一月二〇日、彼は留学先のドイツのベルリンで起草した博士論文「現身仏と法身仏」によって文学博士の学位を取得する。博士論文は一九〇四年に同じ題名の『現身仏と法身仏』として刊行される。この刊行物で提言されているのは、生前中の仏陀が現身仏として仏教徒にどのような影響を与え、入滅後に常住永遠の法身仏として仏教徒にどのように崇拝されているのかを、歴史的視点のもとで研究することである。『現身仏と法身仏』は、右述した宗教学の概念を仏教に適用して論考している。すなわち、人心は仏教徒の宗教意識であり、仏教徒を取り巻く社会は、彼らの仏陀信仰

に基づく世界であり、人心と社会を統括する何か偉大な勢力は仏陀である。しかし姉崎は、留学先に含まれる憧憬国のドイツ（注四）で人心の乱れた現実（皇帝ヴィルヘルム二世［Wilhelm II］の黄禍論、排他的な愛国心と工業の発展に伴う人心の腐敗）に絶望する。同国の人心の退廃的な現状が、留学前にドイツの文明と精神を直接に触れて自分の宗教研究に活かそうという彼の心を打ち砕いてしまっている。そうした折、国内で病床に伏せていた畏友の高山樗牛が日蓮に全面的な信頼を置いた真摯な生き方に、理想の人心のあり方を見出す。（注五）

海外留学から帰国後、姉崎は「「我れ」の中に大宇宙の神秘を発見せしむる宗教」（注六）を抱くようになる。「我れ」と「大宇宙」の関係についての考察が、「国家の運命と理想（愛国者と予言者）」（一九〇四）の中で明らかにされる。それは、「我れ」としての個人の小宇宙が「大宇宙」の中心の国家と相互に円滑な交流が必要になる、という主張である。（注七）彼は一九〇四年の評論の中で、「自分の生命の中に国家の生命を有する信仰と勇気とのある人」、「国家を以て自分の生命とする真正の愛国者」、「その国家の運命を指導する予言者、一国の理想を発揮する聖人」（注八）に言及する。日蓮が姉崎によって、真正の愛国者・指導的な予言者・聖人としての人格者として見なされる。（注九）『宗教学概論』では、宗教学の骨子が人心、それを取り巻く社会、両者を統括する何か偉大な勢力によって構成されていた。海外留学地のドイツでの人心の乱れに絶望して、姉崎はこの骨子の更なる研究促進に挫折する。高山の信仰心の影響のもと、姉崎の宗教思想の原動力である宗教意識は人心であり、その模範者が日蓮となる。日蓮に倣って姉崎の場合、人心を取り巻く社会は日本社会であり、人心と社会を統括する勢力は天皇制国家（注一〇）である。この時期における彼の宗教思想の特徴は、人心、社会、天皇制国家の三位一体で成り立ち、日蓮信仰に依拠した国体論の推進を目指すものとなっている。

二　第一次世界大戦に対する姉崎の見解―道徳の腐敗と宗教の力

一九一四年、サラエヴォ事件（オーストリア＝ハンガリー帝国の皇位後継者が当時のオーストリアのサラエヴォで銃殺）をきっかけに、第一次世界大戦が始まる。姉崎はこの大戦に対してどのような見解を示したのであろうか。この点を検討するため、大戦中の彼の論説を見てみよう。（注一一）一九一四年当初、姉崎は「国際の誤解と同情」の中で、政治・経済・商工業・陸海軍が国際関係を決める要因であることを認めが、道徳も無視できないと主張して、人々の心情の大切さを強調する。（注一二）一九一六年、彼は「戦後の精神的覚醒」の中で、一九世紀の科学時代・工業組織・平民的文明の到来を引き合いに出して、「人類共同精神の発揮、国際精神の発達、而して其が商業と学術と信仰との力で、人類を結合する方に向ふに違いない」（注一三）と判断する。同年、彼は「社会的大洪水」の中で、今度の戦争で成金が国内に蔓延して、知識階級の中流社会が衰退していることを危惧している。その現状は国の衰退につながるからである。（注一四）。同年の「世界の進軍と国際的理想」では、英仏やア

やアメリカや南アメリカ諸国に精神的・道徳的な絆が見られるのは、理想や道徳の力によるものであると語られている。（注一五）

一九一七年における姉崎の四つの評論を考察してみよう。「十二時の打つ時」では、連合国側に国際的な協調精神の気運が見られるので、「世界的大舞台の夜明けは近づきつゝある。鶏は鳴き、東天紅ならんとする。此の時に、尚ほ前夜の夢を繰返す者は、世界の落伍者たらざらんと欲するも、たらざるを得ようか」（注一六）と述べられている。「世界の新局面に対する覚醒」では、第一次世界大戦後の新しい局面を予想して、「人生の根本意義は如何、国家生存の最終理想は如何、人類全体の運命、若しくは方針は如何なるべきか、是等の問題に続々逢着するようになつて来る、さうして是等の問題に対する解釈は、各人各国多少の特色はあるにしても、其れが深い意味に於ける精神的覚醒であると云ふことだけは明かなる事実である」（注一七）と語られている。「対戦第四の年」は、ドイツと日本について論評する。ドイツは、周到な準備（軍備、外交、探偵、工業や経済の配置教育、文書伝道の事業）によって当初は順調に事を進めた。しかし、現在は手詰まりの状態である。相手国の忍耐力や反発心は軽視できないのである。ドイツの戦争遂行が日本人に与える教訓は、過去の戦争の成功を誇り、日本ほど強い国はないという軍事上の慢心と排他的な傾向である。（注一八）この評論は、日本人の道徳上の腐敗を指摘している。「中流社会の衰頽」は、徳義や人心が中庸の生活を送る中流社会の根本的な問題であると論じる。徳義や人心は、それらが希薄になった日本人に求められている。（注一九）

三　姉崎の人本主義と民本主義の提唱―第一次世界大戦後の対処

人間の道徳の腐敗こそが、第一次世界大戦中に発表された一連の姉崎の評論の根底にある主張である。道徳は、人間の精神的な連帯の土台となるものである。道徳を修得するのに欠かせないのが人心である。人心は姉崎の宗教思想の出発点であった。そこで、人間の精神的な覚醒に必要なのが宗教の力である。そのことが、姉崎の「社会的結合と宗教の感化」（一九一七）の終わり近くで次のように書かれている。

> ・・・・・重要なのは即ち宗教の精神的結合力にある。此の結合力は、一方に個人に無尽の価値を認めて之を発揮せしめると共に、又宇宙は、情誼、即ち恩徳と、義務、即ち権威との統合あり、人類は一団として此の二つの関係を完成して統一ある精神理想の団体を組織するにある。此の任に当り得る宗教は即ち将来の宗教である。教理と実行とを一つになつて、此の理想を人々に吹き込み得る宗教が、将来の世界を支配する宗教である。（注二〇）

「個人に無尽の価値を認めて之を発揮せしめる」とは、個人の自由闊達であり、同時に人心の自由闊達でもある。人心の自由闊達は現実の日本社会や現行の天皇制国家との深い関係へとつながるし、また、国際社会との深い関係へとつながる。そこで「宗教の精神的結合力」は、国内統合と国際協調を実現するのに大きな役割を果たす宗教の力を指すであろう。

「社会的結合と宗教の感化」では、姉崎が第一次世界大戦後の新しい国内外の望ましい将来像を考えている。鎌倉時代の宗教者の姿勢を模範として、国内外の現状と未来を見据えている。「宗教の精神的結合力」は、予言者としての日蓮に倣った姉崎（注二一）が大戦後の宗教の重要な役割を強く認識した言葉であろう。

第一次世界大戦の末期、新しい時代に対処するため、姉崎は人本主義を提唱する。同主義は、『世界文明の新世紀』（一九一九）所収の「人本主義の実行」（一九一八）の中で、「個人の人格を尊重すると共に、社会結合 Solidarity の意義を発揚する要求であり、人性の本然に潜在する力量を発揮し、人格の力と社会生活とに依つて、本能を醇化する所以の主義であ」（注二二）り、「人間生活の本能を個人人格と社会結合の二面に於て完成するといふ義」（注二三）である、と述べられている。「新時代の宗教」（一九一八）所収の「世界の新局面に対する宗教の天職」（同）の中で、彼は「社会的制度も、国家、家族の結合も、人間本然の性から出発して人類の結合に進む人道、即ち人本主義の現はれであると共に、宗教は個人と人道とを一貫する人本主義の理想を表現し、従つて、社会、国家、家族は、皆其の根底を人本主義宗教の生命に置き、帰趣を人本主義宗教の理想に求める」（注二四）と書いている。人本主義宗教が、人本主義を発揮する宗教の力として持ち出されている。姉崎は人本主義を人間の生活にも向け、その生活の「根本解決は、人本主義の実行、即ち人間が自らの本性を自覚し、本能の醇化を以て家族と国家と人道とを一貫するにある」（注二五）と主張するのである。彼は、日蓮の存在を意識しながら、自らの宗教思想の骨子（人心、現実社会、天皇制国家）を推進するために人本主義の実行に行き着いている。「人本主義の実行」の終わり近くで、「内治外交共に人本主義の理想を以て一貫せよ。是れ新たる世界に処する日本の道である」（注二六）と表現されている。この表現は、第一次世界大戦後のあるべき国内外の姿を探究する姉崎の宗教思想が国民統合と国際協調を視野に入れたものとなっている。

第一次世界大戦締結の直後、姉崎は「人才の発揚と民本主義」（一九一九）の中で、民本主義の必要性も述べている。そこでは、「民本主義とは、吾吾人間が人間として生活するには、個性の基礎と共に社会結合を要するといふ根本原理であつて、・・・・・社会生活から云はゞ、自覚あり、自治自制の力ある個人が自由の発達を遂げ、其

で相互扶助の社会結合を遂げる事になる。民本主義は、……社会生活の道徳的原理である」（注二七）と述べられている。自らの民本主義と人本主義について、彼は「十九世紀文明の総勘定」（一九一八）の中で、「人性の個性と社会性とを充実するといふ意味で、民本主義の意義を、人間生活の道徳的原理だとすれば、其の究竟は人性本位といふ意味で人本主義といふべきものになる」（注二八）と解説している。彼にとって、民本主義の究極が人本主義となっている。（注二九）彼の宗教思想は、国民統合と国際協調の実現を目標としていた。この目標に欠かせないのが、人本主義と共に民本主義なのである。

四　姉崎の人本主義と民本主義の堅持―聖徳太子と日蓮への信仰

第一次世界大戦後の国内外の秩序の確立を目指して人本主義と民本主義の必要性を主張していた頃、姉崎は聖徳太子の政治と人物像に注目する。太子の政治については、「其の憲法に、国政の大本を説いて、其の理想を、四生［生き物の生れ方を胎生・卵生・湿生・化生に分類する仏教用語］の終帰（即ち本能の醇化）又万国の極宗（即ち精神的結合）たる三宝［仏・法・僧］に置かれたのは、仏教の理想から来た人本主義であった」（注三〇）と見なしている。太子の人物像については、「氏族割拠を打破し、王政統一の下に弘く人民の意義を発揚した」（注三一）と評し、民本気風の盛んな時代の好例として取り上げている。

その後、一九一九年に姉崎は「聖徳太子の理想と政策」の中で、政治の土台を人民に置く民本主義の理想者としての聖徳太子の政治を高く評価し、太子の五つの事跡に言及する。それは、①四天王寺の経営、②遣隋使并に留学生の派遣、③憲法と一体三宝、④一乗の理想と摂受正法の実行、⑤治国の根本としての聖者の人格、である。（注三二）同年、姉崎は「聖徳太子の天王寺経営」と「聖徳太子と支那政策」を発表する。これらの評論はそれぞれ、①と②に言及して、太子の仏教思想を論評する。（注三三、三四）翌年、姉崎の『上宮太子聖徳王』が刊行される。この著書の章のタイトルを見ると、第三章は「太子が経営の規模」、第四章は「『東天皇敬で西天皇帝に白す』」、第五章は「憲法と一体三宝の理想」、第六章は「太子の思想信仰」である。第三章は①、第四章は②、第五章は③、第六章は④を視野に入れたものとなっている。一九二四年に公表された姉崎の『人生の三方面』は、太子の信仰の特徴が三宝の敬慕、隋国との対等外交を支える菩薩行であることを紹介する。（注三五）この紹介は、②と③を踏まえている。

なぜ、日蓮を信仰する姉崎が聖徳太子も信仰するのであろうか。この問題を検討してみたい。姉崎は、上人を人心の模範と見なし、自らの民本主義と相互関係にある人本主義の基軸に人心を置いて、人民や国家のあるべき姿を追究していた。後に彼は、こうした人格者の代表として、上人と共に太子を考えるようになる。（注三六）その太子は、姉崎が求める国内統合と国際協調を実践した模範者だからである。姉崎はこのような実践者の模範として太子の仏教思想へ

傾倒したと言える。日蓮信仰の姉崎が聖徳太子への信仰も可能であったのは、上人と太子が自らと同じく『法華経』を心の拠り所としていたからであろう。

一九三〇年代の日本は、一九三一年の満州事変をはじめとして、一九三二年の満州国の建国宣言、一九三三年の国際連盟の脱退、一九三四年のワシントン条約の廃棄決定を行う。国内では、一九三二年の血盟団事件と五・一五事件、一九三六年の二・二六事件が発生する。こうした不穏な状況に直面して、彼が宗教を心の拠り所とする。一九三五年一月、彼は宮中御講書始めの儀で聖徳太子の十七条憲法を進講し、昭和天皇（一九〇—八九）に立憲君主としてのあり方を説明している。そこには、今こそ天皇制国家のもとで国民が統合する必要性を主張する彼の姿を思い起こさせる。

第二次世界大戦（一九三九—四五）の終結後の一九四七年、姉崎は「我国の天職」の中で、東洋文化と西洋文化の相違を指摘する。東洋文化の基本は主観によって自分の心と天地が一体になることであり、西洋文化の基本は外に向かって発動し、外物と相対して天地を自分に利用することである。前者が「静観内省」「一如一体観」「内潜一如観」と書かれていて、後者が「実験観察」「両分観二元観」と書かれている。彼は、今後の日本が東洋文化の根幹に西洋文化の花を咲かせ実を結ぶべきであると説いている。その点で、日蓮は、東洋に見られる内潜反省（如是観、一念三千、本仏の釈尊との一体、『法華経』の聖者たちとの連なり、宇宙の生命との一体）と、西洋に見られる外発活動（当時の教権執着への奮闘、迫害の挑発、危難の克服）を統合した模範として紹介される。（注三七）この紹介は、上人の人格が隋との協調、国内の統一に尽力した太子の人格と共通することを思い起こさせるであろう。

同じ一九四七年に刊行された姉崎の『維摩経体験者聖徳太子』は、太子を人格と信念が立派な維摩居士の体験者として取り上げて、太子のような体験者がこれからの日本で出現することを望むことで終わる。（注三八）同年の彼の「仕かけと目あて　機械観と目的観」は、原子爆弾に象徴される西洋の科学に盲信する機械観ではなく、人間生活の理想を高揚し、その目指す所を求める目的観を論考する。（三九）本稿での考察が示すように、この目的観に立脚した人物が彼にとって、日蓮と太子であったと思われる。それは、彼が日蓮信仰と太子信仰を共有するからである。

終戦を迎えた一九四五年八月一五日、姉崎は昭和天皇の玉音をラジオで聴いて、「血涙の思して拝聴す、事ここに至りては何をかいはん、只従来の路を棄て、現実の下に新建設に精進せんのみ」（注四〇）という感情を吐露する。この感情は、彼が新しい日本を再建するための努力の表明と受け止めることができよう。彼は、第一次世界大戦に遭遇した場合のように、人本主義と民本主義に基づく宗教思想を抱いて、国際協調と国内統治の確立を再び目指すことを放棄していない。第二次世界大戦中の姉崎の言動を考えると、大戦後の彼の心を支えているのが日蓮信仰と太子信仰であると言えよう。

おわりに

幼少期から、姉崎正治は何よりもまず人心を重視した。その一因は、京都の生家の家族が信仰する浄土真宗に不満（現実ではなく、

極楽往生に目を向けること）（注四一）であったことだと思われる。実家の宗教に懐疑的であった姉崎を日蓮信仰へ導いたのが高山樗牛であった。日蓮信仰を通して、それまでの姉崎が抱いていた宗教思想の枠組みが変わる。日蓮こそが、人心の模範者であり、現実社会の問題に果敢に立ち向かい、国家建設を目指す人格者なのである。姉崎にとって、現行の天皇制国家が人心と社会を統括する勢力となる。

人心がこの新たなる枠組みの原動力である。第一次世界大戦の末期、戦後の国内統治と国際協調を見据える姉崎は、この原動力を推し進めて、人間の人心と社会関係を重視する人本主義と、人間の社会生活の道徳的原理を注視する民本主義を主張する。これら二つの主義が、姉崎の宗教思想に反映される。晩年の彼は、このような宗教思想を堅持して、第二次世界大戦後の混乱した日本社会の再建を目指そうと決意する。姉崎の宗教思想の一面は、彼が直面する国内外の社会問題に対処するためのものであったと結論づけられよう。

注

一　姉崎正治『宗教学概論』東京専門学校出版部、一九〇〇年、一頁。

二　姉崎正治「世界統一の予言（聖祖降誕会に於て）」『大崎学報』二、一九〇五年。五四頁。

三　幼少期の姉崎は、仏画師であった父親の姉崎正盛（一八三七―八一）が仁孝天皇の第三皇女の桂宮淑子内親王（一八二九―八一）に仕えていたことを身近に感じながら育っている。正治にとっての天皇観の土台は、この時期に培われたと思われる。

四　石関敬三・紅野敏郎編『大西祝・幾子書簡集』教文館、一九九三年、三〇一頁、および姉崎正治「樗牛に答ふるの書」（一九〇一―〇二年）（姉崎正治『文は人なり』「樗牛嘲風往復集」博文館、一九二二年［初出一九七四年］、三九六頁）を参照。姉崎嘲風は姉崎正浩のペンネームである。

五　高山の影響による姉崎の日蓮信仰の経緯については、拙稿「姉崎正治の日蓮傾倒の経緯―彼の海外留学（一九〇〇―〇三）を手がかりとして―」『言語文化学会論集』四六、二〇一六年を参照。

六　姉崎正治「現時青年の苦悶について」『太陽』九―九、一九〇三年、八四頁。

七　姉崎正治「国家の運命と理想（愛国者と予言者）」『時代思潮』一―三、一九〇四年、二九頁。

八　同右、三〇頁。

九　同右、三一頁。

一〇　この時期の姉崎にとって国家が天皇制の国民国家であることについては、彼の『南北朝と国体の大義』博文館、一九一一年、九四―九五頁を参照。

一一　この点については、拙論「姉崎正治と第一次世界大戦」『比較文化研究』八八、二〇〇九年に記述された内容を参照している点をお断りした。

一二　姉崎正治「国際の誤解と同情」『丁酉倫理会講演集』一四六、

一九一四年、六五―六六、七三―七六頁。

一三　姉崎正治「戦後の精神的覚醒」『人文』一―八、一九一六年、五頁。

一四　姉崎正治「社会的大洪水」『人文』一―一〇、一九一六年、三、七頁。

一五　姉崎正治「世界の進軍と国際的理想」『丁酉倫理会講演集』一七二、一九一六年、二六―七頁。

一六　姉崎正治「十二時の打つ時」『人文』二―四、一九一七年、八頁。

一七　姉崎正治「世界の新局面に対する覚醒」『雄弁』八―一三、一九一七年、六頁。

一八　姉崎正治「対戦第四の年」『人文』二―八、一九一七年、三―七頁。

一九　姉崎正治「「中流社会の衰頽」『人文』二―一〇、一九一七年、二六頁。

二〇　姉崎正治「社会的結合と宗教の感化」『人文』二―六、一九一七年、九頁。

二一　予言者日蓮についての姉崎の見解は、姉崎正治「予言者日蓮」『学生』七―五、一九一八年、一五―二四頁を参照。

二二　姉崎正治「人本主義の実行」一九一八年（姉崎正治『世界文明の新世紀』博文社、一九一九年、一一〇頁。）

二三　同右、一一二―一三頁。

二四　姉崎正治「世界の新局面に対する宗教の天職」一九一八年（姉崎正治『新時代の宗教』博文社、一九二〇年〔初出一九一八年〕、二五一頁。）

二五　姉崎前掲「人本主義の実行」一〇六―〇七頁。

二六　同右、一四四頁。

二七　姉崎正治「人才の発揚と民本主義」一九一九年（姉崎前掲『世界文明の新世紀』三四四頁。）

二八　姉崎正治「十九世紀文明の総勘定」一九一八年（姉崎前掲『新時代の宗教』六三頁。）

二九　長尾宗典「第一次世界大戦の姉崎正治―雑誌『人文』誌上における「文明批評」と「人本主義」『史境』七四、一九一七年、一四頁。

三〇　姉崎前掲「「人本主義の実行」一四二頁。

三一　姉崎前掲「人才の発揚と民本主義」三四五頁。

三二　姉崎正治「聖徳太子の理想と政策」三―一〇、一九一九年、一―三九頁。

三三　姉崎正治「聖徳太子の天王寺経営」『人文』四―二、一九一九年、三―六頁。

三四　姉崎正治「聖徳太子と支那政策」『人文』四―三、一九一九年、三―五頁。

三五　姉崎正治『人生の三方面』日本青年館、一九二四年、六四―六七頁。

三六　姉崎の聖徳太子への心酔については、拙稿「聖徳太子の仏教思想についての姉崎正治の考察」『言語文化学会論集』四五、二〇一五年を参照。

三七　姉崎正治「我国の天職」『法華』三四―一、一九四七年、三―

六頁。

三八　姉崎正治『維摩経体験者聖徳太子』平楽寺書店、一九四七年、一〇七頁。

三九　姉崎正治「仕かけと目あて　機械観と目的観」『倫理』五四一、三五―五一頁。

四〇　姉崎正治「崩雲行」『信人』一―六、一九四六年、一四頁。

四一　姉崎正治「邦人性格上の一大欠点」『六合雑誌』一一七、一八八号、二二―二九頁。